

行草作品における文字構造上の傾倒

角 田 健 一 (大 壤)

Kenichi (Tajyo) Tsunoda

先秦の肉筆文字には、すでに右上がりや右下がりといった横画がどちらかに傾く状況が見られるが、右上がりや円転のリズムを持つ楚系の青銅器や肉筆文字を除けば、あくまでも書き手の書き癖などといった一過性で自然発生的なものに過ぎない。ただし、戦国時代の肉筆文字には隷書の胎動が見られ、前漢では完全な波磔を持った隷書が生まれている。後漢に至って波磔をもつ隷書が碑文に刻まれるが、金石文の普遍的文字に動きやリズムが内在した初期の時代ともいえる。

隷書は一般的に水平で書かれる。ただし実際に小篆のように横画の全てにおいて厳密に水平を意識して書かれるかといえばそうではなく、偏旁で総合的に水平を保とうとする文字も少なくない。これは波磔や線に内在する波勢、とりわけ右払いが生まれたことに起因していると言つて良いだろう。

楷書の時期になると原則的に横画は右上がりとなり、「力の均衡」

で字形を保つようになる。これに起因して記念碑的要素の強い金石文でも前傾を保つ文字（碑）も珍しいものではなくなった。なお、この前傾の傾向は僅かながら既に漢碑から見られる。

実のところ、楷書の成立以前には正面向き、ないし前傾以外の古典は、ほぼ見られない。これは、木簡・竹簡・残紙や王羲之、顔真卿、狂草の懷素、張旭の行草書の書跡でも同様であり、一部例外的に後傾の結体をとる文字はあるが、ほんの僅かである。

後傾の行草書作品が現れるようになるのは宋代の蘇軾や黃庭堅の行草書からであろう。米芾は、「蜀素帖」をはじめとし、前傾の結体を多用する傾向が強く、そのイメージも強いが一概に全て前傾というわけでもない。宋代以降、行草書における文字構造の傾倒は一般的に、そして意識的に行われる様になったといえよう。

拙作は、前傾の行草書を基盤とし制作した。草稿の段階からは幾分変わったが、最終的にはもともと熱気を感じる作を選んだ。



60×160cm

茶爐烟起知高興、
棋子聲微識苦心